日本古典全書

井原西鶴集 一

監修　高木市之助　久松潛一
山岸德平　小島吉雄

井原西鶴集

一

藤村作校註
田崎治泰補訂

朝日新聞社刊
日本古典全書

藤村　作（ふぢむらつくる）
明治八年福岡縣生。昭和二十八年歿。東京大學國文學科卒。東京大學教授、東洋大學長、東京大學名譽教授等を歴任。主著―日本文學原論、古事記、萬葉集、竹取物語の評釋等。

田崎治泰（たざきはるやす）
明治四十五年東京都生。昭和四十四年歿。東京大學國文學科卒。都立戸山高校教諭、共立女子短期大學講師を歴任。

日本古典全書
「井原西鶴集」一　藤村　作校註
田崎治泰補訂
昭和二十四年九月三十日初版發行
昭和四十八年三月二十日補訂初刷發行
印刷所　株式會社精興社
發行所　朝日新聞社（東京都千代田區有樂町・大阪市北區中之島・北九州市小倉區砂津・名古屋市中區榮）
定價　八二〇圓

1391-211047-0042

目次

解説……三
一、西鶴……三
二、好色一代男……三
三、好色五人女……一七
四、文體……三
五、西鶴を生んだ社會……二四
凡例……三三
好色一代男
巻一……二七
目錄……二七
けした所が戀のはじまり……二八
はづかしながら文言葉……四〇
人には見せぬ所……四三

袖の時雨は懸るがさいはひ……四五
尋てきく程ちぎり……四八
煩惱の垢かき……五一
別れは當座はらひ……五三

卷二……五七

目錄……五七
はにふの寢道具……五八
髮きりても捨られぬ世……六一
女はおもはくの外……六三
誓紙のうるし判……六六
旅のでき心……六九
出家にならねばならず……七二
うら屋も住所……七五

卷三……七九

目錄……七九
戀のすて銀……八〇
袖の海の肴賣……八二
是非もらひ着物……八五
一夜の枕物ぐるひ……八八
集禮は五匁の外……九一
木綿布子もかりの世……九四
口舌の事ふれ……九七

卷四……一〇一

目錄……一〇一
因果の關守……一〇二
形見の水櫛……一〇五
夢の太刀風……一〇八
替つた物は男傾城……一一一
晝のつり狐……一一四

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

目に三月……一二六　火神鳴の雲がくれ……一二九

卷五……一三三

目　錄……一三三
後は様つけて呼……一三四
ねがひの掻餅……一三七
欲の世中に是は又……一三〇
命捨ての光物……一三三
一日かして何程が物ぞ……一三五
當流の男を見しらぬ……一三八
今爰へ尻が出物……一四一

卷六……一四五

目　錄……一四五
喰さして袖の橘……一四六
身は火にくばるとも……一四九
心中箱……一五二
寢覺の菜好……一五五
詠は初姿……一五八
匂ひはかづけ物……一六二
全盛歌書羽織……一六五

卷七……一六九

目　錄……一六九
其面影は雪むかし……一七〇
末社らく遊び……一七三
人のしらぬわたくし銀……一七六
さす盃は百二十里……一八〇
諸分の日帳……一八三
口添て酒輕籠……一八七
新町の夕暮嶋原の曙……一九〇

巻八……一九五
目錄……一九五
一盃たらいで戀里……二〇一
らく寢の車……一九六
都のすがた人形……二〇四
情のかけろく……一九八
床の責道具……二〇七
跋……二一〇

好色五人女

巻一　姿姫路清十郎物語……二一五
目錄……二一五
太皷による獅子舞……二二三
戀は闇夜を晝の國……二一七
狀箱は宿に置て來た男……二二六
くけ帶よりあらはるゝ文……二二〇
命のうちの七百兩のかね……二二九
巻二　情を入し樽屋物がたり……二三三
目錄……二三三
京の水もらさぬ中忍びてあひ釘……二四二
戀に泣輪の井戸替……二三五
こけらは胸の燒附さら世帶……二四七
踊はくづれ桶夜更て化物……二三八
木屑の杉やうじ一寸先の命……二五〇
巻三　中段に見る暦屋物語……二五五

目　録……二五五
姿の關守……二五七
してやられた枕の夢……二六一
人をはめたる湖……二六六
小判しらぬ休み茶屋……二六八
身の上の立聞……二七三
卷四　戀草からげし八百屋物語……二七七
目　録……二七七
大節季はおもひの闇……二七九
蟲出しの神鳴もふんどしかきたる君さま……二八二
雪の夜の情宿……二八七
世に見をさめの櫻……二九〇
樣子あつての俄坊主……二九三
卷五　戀の山源五兵衞物語……二九七
目　録……二九七
連吹の笛竹息の哀や……二九九
もろきは命の鳥さし……三〇二
衆道は兩の手に散花……三〇四
情はあちらこちらの違ひ……三〇九
金銀も持あまつて迷惑……三一一
索引……三一七
好色一代男事項索引……三二八
同　語彙索引……三二九
好色五人女事項索引……三三六
同　語彙索引……三四一

井原西鶴集

一

藤村作
田崎治泰

解　說

一、西　鶴

井原西鶴の傳記は資料の極めて乏しいために、立派に纏まつたものはない。斷片的なものを集めて、その生涯を麗げに纏め擧げてゐるに過ぎない。

先づ井原西鶴とは何人であるか。これに關して昭和四年一月發行の「國語と國文學」新資料の研究と題する特輯號の中に、余は、

今年春の頃とおぼえてゐる。友人笹野堅君が訪れられて、井原西鶴の實名は既に世に知られてゐるかと問はれた。余は嘗て聞いたことはないと答へると、それではまだ多く世に知られてゐないであらうといつて、日本藝林叢書第八卷見聞談叢の一節を示された。余は一讀して、その注意すべき珍しい新資料であると考へたから、君に進んで考證研究をなして世に發表されんことを請うたが、謙遜な君は然るべくと發表のことを余に讓られた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

ので、「一先づ筆を執つて單に學界に報告することとした」といつて、『見聞談叢』の左の一文を掲げた。

貞享元祿の頃、攝の大坂津に、平山藤五といふ町人あり。有德なるものなれるが、妻もはやく死し、一女あれども盲目、それも死せり。名跡を手代にゆづりて、僧にもならず、世間を自由にくらし、行脚同事にて頭陀をかけ半年程諸方を巡りては宿へ歸り、甚俳諧をこのみて、一晶をしたひ、後には流義も自己の流義になり、名を西鶴とあらため、永代藏、又は西ノ海、又は世上四民雛形などいふ書を、作れるものなり。世間の吉凶悔吝患難予奪の氣味、よくあしらひ、人情にさとく生れつきたるもの也。又老莊ともみえず、別種のいき形とみゆ。黑田侯歸國の時、大坂の御屋敷へ、大坂にて召して、次にてはなし聞き給ひ、世上へ出し、使番聞番留守居の役に云付侍らば、かゆき所へ手のとゞくやうにあらん人がらと稱し給ふよし。（以下略）

なほ余はこれに關して、

この新資料について、余の先づ喜ぶ所は、『見聞談叢』の著者が、その人物に於て相當信賴をなし得べき人であり、またその記錄された年代が西鶴の在世時に近いことである。この二點において本資料は相當に敬意をもつて取扱はるべきものであらう。

この新資料に據れば、西鶴の實名の平山藤五であつたことが知られる。井原といふのが苗字でなかつたとすれば、井原西鶴は雅號のやうなものであらうか。次ぎに彼を武家の出身であらうかといつた疑

ひも、單に疑ひに止つて、大阪の町人であつたことになる。作品から察すると、いかにもこれが眞實らしい。『元祿太平記』が彼を貧乏者と傳へて、誰も疑ふものはなかつたやうであるが、この資料に依ると、もと相當富んでゐた家に生れたが、後その家を手代に讓つて、俳諧や浮世草子などに筆を執つて、專ら世を自由に暮らしたといふから、生得の貧乏者ではなかつたこととなる。この點も彼の作から考へ、これまで知られてゐた經歷と照らし見て興味多く思はれる。

獨身者であつたらしいといふ想像はよく當つてゐたこととなるが、しかし嘗ては妻も持つたが、夙く死なれてしまひ、一女子も盲目の上に早世してからは、全く獨身であつたと見える。一目玉鉾の著述のあることや、好色本その他の作が三都ばかりでなく廣く地方にわたつて材を得てゐる趣から察して、彼が旅行家であつたといふ想像もこれに依つて確められるわけである。一年の半分も旅に出てゐたといふことはいかにもさうであつたらしく思はれる。ここに疑問となり、その解決の望ましいことは、著作についてこの資料の傳へる所である。永代藏はいいが、西の海、世上四民雛形といふのは永代藏の別名の意でいふのか、文が不明確であるが、今日傳へてゐる日本永代藏の二種の本には新長者敎の別名を傳へて、西の海とも世上四民雛形とも傳へてゐない。永代藏の外にこの二書があるの意かとも取られるが、それにしても、余の寡聞まだかかる著作を見たことなく、またかかるもののあることを傳聞したこともない。偏へに特志家の研究示敎を俟つのである。

と記して置いた。爾來將に二十年に垂んとしてゐる。この間に世の西鶴に關する研究も進んだが、この資料の所傳を否定すべき新發見もなく、學者は寧ろこの資料以上に彼の素性などを知るに價値ある資料は、今迄のところないと諦めてゐるやうである。

さうすると、西鶴は平山藤五と稱した、大坂町人の出で、もと相當の家に生まれたが（其角の句兄弟に「されば難波江に生れて住よしのくまなき月をめで云々」とある）、後家業を手代に讓つて、自分は自由の境遇に入つた人であり、妻子もあつたが、妻は彼に先だつて死に、一女子は盲目の上に早世したのである。自由の身となつてから、所々の旅行に日を送つた。文藝の生活に入つたのは、十五六歳から俳諧に親しんだのを皮切りに、四十歳を超えて浮世草子の作に從つた。有名な『好色一代男』は實に天和二年（一六八二）四十一歳の年出版されたのである。

生歿の年は、彼の遺作の一たる『西鶴置土產』卷頭に載せた辭世の發句の日附が基礎になつて、寛永十九年（一六四二）の生まれで、元祿六年（一六九三）に死歿したと知られる。この辭世句の日附は「元祿六年八月十日五十二歳」とあるが、この八月十日といふのは、辭世句を詠んだ日のことか、死んだ日のことか、この文だけでは明瞭を缺くのである。大阪東區上本町四丁目誓願寺に在る墓碑には「元祿六年癸酉八月十日」とあつて、右と全く一致してゐるから疑ひはないやうなものの、唯一つ遺作の一である『俗つれ〳〵』の卷頭、門人北條團水の序文に、

花の春もみぢの秋去て、さだめなき時雨月のはじめ、此俗つれ〳〵をながきかたみにして、松壽西鶴のかぎりある今はの時云々

とあるので、八月十日は辭世句の日附で、それから中一ヶ月病褥にあつて十月に死んだと解することも、常識上妥當であるから、一概にはいひ難いやうな氣もする。余も誓願寺の墓石が元祿時代のままのものとしては、餘りに磨滅破損のないので、專門的な科學者の意見を徵して見たいと考へてゐる。

『大矢數』に「予俳諧に入て二十五年晝夜心をつくし云々」とあり、この『大矢數』は延寶八年(一六八〇)の出版であるから、十五歳の少年期から俳諧に入つたことは確實であり、爾來生涯斯道に盡瘁したことはその俳諧關係著作の出版のほぼ晩年まで通じてなされてゐることでわかる。俳人としては、彼は談林派に屬し、西山宗因を師とした。その發句の如きは談林派の發句が今日すでに定評があつて、高い文藝價値を認められないやうに、彼の句も不朽に傳はるべきものはないが、その連句にあつては、多數吟の驍將として、自他共にゆるしたもののやうである。彼は數度矢數俳諧を催して、多數吟の競爭を行つた。その中で特に著しいのは最後の興行で、一日一夜の獨吟實に二萬三千五百句に達して、世人を驚倒せしめてゐる。

このことは餘りに莫大な句數なので、後世から眞僞の疑はれるところもあつたが、『置土產』卷頭の追善發句中に如貞の「月に盡ぬ世かたりや二萬三千句」があり、其角が『五元集』に、

住吉にて西鶴が矢數俳諧せし時に後見たのみければ

驥の歩み二萬句の蠅あふぎけり

ともあり、さらに寶永二年（一七〇五）西鶴十三回忌追善の『心葉』の中に北條團水の記した文に、

近比井原西鶴と云者あり。攝の浪速の產なり。西山梅花翁の門より出で、俳諧を以て名を天下に飛（とば）す。……西鶴一日獨吟の千句を誦して、後四千句を獨吟して、梓行世に蔓る。これより多武峯の紀子、仙台の三千風、才麿、一晶等各數千句或は一萬句餘まで獨吟したりけり。世に矢數俳諧と稱する濫觴は西鶴に始りける。

さる程に貞享元年六月五日攝の住吉の神前に於て西鶴亦一日一夜の獨吟二萬三千五百句を唱て、然も楮上に顯はす。……これより自號して二萬翁と呼。見聞の徒神を以て稱せずと云ことなし。……其日席にあるもの高瀧以船、前川由平、岡西惟中……、此日江戸の其角來り合せて、蠅拂の句を吐く。遠近の輩神前に群り觀ること堵の如し。

とあるのは、何よりも動かし難い事實の證據である。蠅拂の句といふのは、前掲『五元集』中の句を指してゐること疑ひない。既にこの事實を肯定する以上、この超凡の事蹟を成し遂げた能力を推定することは出來るはずである。そもそも談林連句の附合は聯想を基礎とすることの最も著しいものであり、また西鶴らの連句の一特徴は卑近な實生活中に材を取ることであるから、次ぎの二つの能力を推定することは決して不當であるまい。その一は彼は人生に驚くべき豐富な知識を有した非凡な記憶力の持主であつたこと、

さうしてその豐富な知識を、連句の中に自由自在に驅使し得る超凡な聯想力を有してゐたことである。この二つの能力の超凡なことによつて、彼は普通の人の神技視し、不可能視したことを成し遂げ得たに相違ないのである。これは獨り彼の俳人としての特徴を考へるべき要鑰たるのみならず、また彼の浮世草子の特徴を考へるためにも甚だ有益な條件たるべきものである。

彼の日常生活については、行脚旅行に一年の一半を送つてゐたことを、『見聞談叢』は傳へてゐる。それを信ずるとしても、なほ餘の一半はどうしてゐたであらう。『元祿太平記』は彼の傳記閲歷を知るに信賴すべき資料を與へてくれる書とはし難いが、それでも、

此の道の作者西鶴といふ男出生して、春の花の朝秋の月の夜毎に伊丹諸白を引かけ、二人機嫌の醉興の餘り、寄太鼓を叩き、戀の湊を引舟に乘つて、色道のよしあしを悉くおしはかり

とあるのは、好色本の作者としてかうした方面の生活を有した人であることを肯定させる一資料たるに足るやうである。また實際かうした生活の體驗なしに、彼の好色本のやうなものの書けるといふことは想像し難いことである。併しそれも單に遊蕩好色の耽溺者であつたことをいふのではない。前にも引いた『心葉』の中の湖梅といふ人の句の詞書に、

井原入道西鶴は風流の翁にて机に蘭麝を這し、釣舟に四季のものを咲せ、哥行引曲をさとりて、俳諧の通達なる事浦山の賤の子も乳房を離してこれを訪ふ。下戸なれば飲酒の苦をのがれて、美食を貯へ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook